

野垂れ死ねと言われ
家を追い出されましたが幸せです

ローレンス・ステアート

フローラの母の弟で、叔父。
本来は穏やかで冷静だが、
フローラをととても可愛がっている。

ブラッディ・ランベル

王弟。臣籍降下し公爵を賜る。
一途にフローラの母だけを愛し続けている。
一方で冷徹な面もあり
陰で魔王とも呼ばれている。

エリザベス・フォネス

フローラの義理の姉。
妹気分を味わいたいからか、
フローラのことを異母姉と呼ぶ。

ロイド・ストレジア

ストレジア王国の第三王子。
末っ子でやや甘えた考えの持ち主だったが
あることをきっかけに再教育を受ける。

フローラ・フォネス

虐待を受けているが屈しない精神力の持ち主。
12歳の時に邸を追い出され、死亡届を出されてしまう。
引き取られてからはルナフローラと名乗る。

フェリクス・ストレジア

ストレジア王国の第二王子。
初恋の相手フローラが亡くなったと
聞いてから人を寄せ付けない、
笑わない王子と呼ばれるように。

目次

野垂れ死ねと言われ
家を追い出されましたが幸せです

7

番外編 スタイアートの家の跡取り

287

野垂れ死ねと言われ
家を追い出されましたが幸せです

第一章 プロローグ

バシッ

今日何度目かも分からない痛みを頬を押さえる。

蹴られたお腹も背中も痣だらけだろう。

「この邸から出て行け！」

ああ、やっぱり貴方は私を捨てるのですね。

「今をもつてお前は私の娘ではない」

何を今さら……

「二度と顔を見せるな！」

ええ、私だって二度と会いたくないわ。

「さっさと出て行け！」

そう言つて父は——フォネス伯爵は、骨と皮しかない私の腕を折れそうなほど強く握つて玄関まで引きずつていく。そのまま執事に扉を開けさせ私は地面に叩きつけられた。

「何処へでも行け！　そして野垂れ死ね！　お前の死亡届は出しておいてやる！」

叩かれた頬は熱く、触らなくても分かる。身体中痣だらけだろう。まだ前回叩かれた時の腫れも引いていないというのに……

それに地面に叩きつけられたせいで手と足にできた擦り傷からも血が出ている。

立ち上がつて「……お世話になりました」と頭を下げた。そうしないと今までの経験から次はもっと酷い暴力を振るわれることになるかと知っていたから。

「さあ、早く出て行きなさい」

ニヤニヤと私を見下ろす女。お母様亡き後にすっかり後妻に収まった義母。先妻の娘の私が疎ましかつたのだろう。私を最初に使用人扱いをするように命じたのはこの女だ。派手な化粧に常に胸元が開いているゴテゴテしたドレスを好んでいるようだが、はつきり言つて下品。

「お義姉様あ、お可哀想」

便乗して義妹エリザベスが言う。何かお義姉様だ……同じ年でも彼女の方が数か月早く生まれてくるくせに。

憐れむように「お可哀想」つて言っているが本心ではないことは顔を見れば分かる。

お母様が私を妊娠する前に、父親が愛人との間に作った娘。顔は義母似。髪色は義母と同じ茶髪。瞳の色も義母と同じ緑色。……この三人が並ぶとまさに親子だ。

私は顔立ちも銀の髪色もお母様から受け継いだ。瞳の色はどちらとも違う……アメジストのような紫色だ。父親に似ているところが一つもない。……よかった。この先、鏡を見る度にこの男を思

い出すことは無いだろう。

死亡届を出すと云ったわね。

そうでしょうとも、十二歳の子供が着の身着のままお金もなく家から追い出されて生きていける訳がないものね。

このままこの家にいたらいずれにせよ虐待か栄養失調で命を落とすことは目に見えている。もうここに戻って来ることは二度とないだろう。それこそ本望だ。そのまま『さようなら』っと、心中で呟いて元家族に背を向けて門を潜った。

歩き出しても父親の怒鳴り声と義母と異母姉の嘲笑う声がしばらく聞こえていた。

昨日の朝から水しか口にしていない。力の入らない足でふらふらと歩きながらも歩を進める。

受け入れてもらえるかは不安だけれど……でも、もう私にはあそこしかない。それでダメなら元父親の望んだ通り野垂れ死ぬことになるだろう。

それでも領地で追い出されなくてよかった。王都にいる今なら、まだ十二歳の私でも歩いて目的地まで辿り着ける。

お母様が生きていた頃に一度だけ王城に連れて行かれた記憶がある。大きな邸の前を馬車で通り過ぎた時『ここがお母様の育ったお家よ』と懐かしそうにしながら教えてもらったお母様の実家。

お母様には弟がいて、八歳年が離れていると言っていた気がする……だから今は二十一歳だと思っ。

『ローレンスはね、素直で優しくとつてもいい子なのよ。フローラにも会わせてあげたいわ』

お母様は懐かしむように、でも泣きそうな顔で弟のローレンス叔父様の話をよく聞かせてくれた。そんなお母様の話にはローレンス叔父様以外の身内の名は一度も出たことはなかった。私は幼いながらも祖父母のことは聞いてはいけないような気がしていた。

行き先のない私は会ったこともないローレンス叔父様を頼るしかない。こんなみすぼらしい身なの私を受け入れてくれるだろうか？ お母様の娘だと信じてくれるだろうか？

……不安で足が止まりそうになる。

それでも私にはそこ以外に行くところがない……

『これだけは肌身離さず持つていなさい。いつかきつとフローラを守ってくれるわ』

お母様が亡くなる前にそう言って私に持たせてくれた大きなアメジストの宝石がついたネックレス。

誰にも見つからないように下着に縫い付けたポケットに隠し持っていたネックレスが役に立てばいいのだけれど……

こうなったのもすべて、二年前のあの時から……

お母様が亡くなったのは二年前。

王都にある父の邸で、お母様はひっそりと亡くなった。お葬式にすら父親は顔を出さなかった。私と、執事と使用人だけでお母様を見送った。

普段からお母様と父親が顔を合わすことはほとんどなかった。いいえ、父親が邸に帰ってこなかっただけ。

父親に会えなくて寂しい思いをしたことはなかった。だって私にはたっぷり愛情を注いでくれるお母様がいたから。それに当時は使用人たちも良くしてくれていた。

父はお母様のお葬式の二日後には義母と異母姉を連れて帰ってきた。大好きなお母様を亡くして泣いてばかりの私を部屋から無理やり連れ出した先には、義母と私よりも数ヶ月早く生まれたという異母姉がいた。

その当時十歳とはいえ、令嬢教育を数年間受けていた私は、帰ってこない父親が不貞をしているとうすうす感じていた。それでもそれがお母様と婚姻を結ぶ前からの不貞だとは思いませんでした。数回しか顔を合わせたことのない父親に別に期待もしていなかったし、ショックもなかった。

ただ軽蔑しただけ。

それにお母様の口からこの父親を尊敬する言葉も、愛ある言葉も聞いたことがなかったから。悪口も聞かなかったけれどね。その頃には二人は政略結婚だと理解していたから。

お母様はいつも初恋の人のことをそれは嬉しそうに、恥じらいながらよく話してくれた。お母様が亡くなるまで……お母様はずっと初恋の人を思っていた。

よかった。こんな夫としても、父親としても尊敬するところが一つもない人がお母様の想い人ではなくて……

だから父親が義母と異母姉を連れてきた時からすでに予測はしていた。……この邸に私の居場所がなくなると。

まず、私の部屋は異母姉の部屋に。そして私は使用人部屋に。次に、それを咎めた執事や侍女長を解雇し、私に優しくかった使用人がいなくなるまでに二か月もかからなかった。

それからだ。私が伯爵令嬢だと知らない者ばかりになると、義母の命令で使用人以下の扱いをされるようになったのは……

早朝から水仕事。朝食も昼食も夕食も使用人の残り。それも残りがあればの話。一口も口に出れない日も珍しくはなかった。そんな生活に日々耐えていた。

そんなある日、私宛てに王家からの手紙が届くと、私に感心のなかった父親が『なぜお前宛てに届くのだ！』と怒鳴り散らし私の頬を叩いた。

幼い頃に一度だけ、お母様と王宮に行ったきり。だから私にだって手紙が届いた理由は分から

ない。

そして訳も分からずその手紙の内容も伝えられないまま馬車に乗せられた。着いた先はフォネス伯爵家の領地の本邸。初めて訪れた本邸の用人には、身なりから最初は私が伯爵家の令嬢だと信じてもらえなかった。

それも当然だと思ふ。以前の令嬢らしく手入れをされていた面影など今の私にはないのだから……

それでもフォネス伯爵家の家紋のついた馬車に乗ってきたことで一応は認めてくれたのか、久しぶりに温かい食事にふかふかのベッド、温かいお風呂に用人たちからの丁寧な扱いを堪能することが出来た。

……それも束の間だった。四日後には義母と異母姉が文句を言いながらこの本邸に現れたのだ。温かい朝食の後、テラスでのんびりお茶をしていたらエントランスの方が騒がしくなり、ヒステリックな声が聞こえてきた。ああ、天国もここまでね。はあ〜と長いため息が出た。

ノックもなく扉の開いた先には派手なドレスに濃い化粧の義母が鬼の形相で立っていた。その後ろから異母姉がニヤニヤと笑って覗いていた。

「アンタ！ 何を勘違いしているの？ あの女とアンタはあたくし達の十年間を奪っていたのよ！ ここに居る限り死なない程度にこき使ってやるわ！ 分かったらそのドレスを脱いで用人用の服に着替えなさい！」

……納得はしていない。でもこの義母はすぐに手が出ることは経験済み。

『……はこ』

部屋を出ようとした私の前に立ち塞がり手を振り上げた。

パンツ！

……ほら、ね。この日から王都にいた時よりもキツく耐える日々が始まった。

お母様が亡くなって一年が過ぎた。

その間に父親がここに来たのは三回。義母と異母姉は二か月に一度は王都に行く。その間だけ私の頬が赤く腫れ上がることも背中に痣ができることもない。だって、私に暴力を振るうのは父親と義母だけだから。

いつも山のようにドレスや宝石を買ってきて見せびらかすのは義姉。義母に似て派手なドレスばかりで羨ましいと思ったことは一度もない。それどころか用人服しか持っていない私でも、恥ずかしくてあんな派手なドレスもゴテゴテした宝石も身に着きたいとは思わない。

それにしても、義母の目がないのだから今ぐらいいちやんとした物が食べたい。贅沢は言わない。使用人と同じ物でいいのに……お風呂だつて入れなくていいから温かいお湯を使わせてほしい。

あの義母は宣言通り、本当に死なない程度に食事を与えてこき使う。

暴力だつて顔は手で叩き、体は足で蹴る。足で人を蹴るなんて貴族の夫人としてどうなの？ 鞭など道具を使われないだけマシか。あと言葉使いもお母様と比べるまでもなく品がない。

まああんな人たちのことはどうでもいいから、お腹が空いた。いつか苦しくなるくらいお腹いっ

ばい食べたい。水でお腹を膨らませるのはもう嫌だ。

今回は一か月程であの二人が帰ってきた。今回も買い物三昧だったので。乗ってきた馬車の他に二台の馬車から使用人総出で荷物を運んでいるから。毎回、こんなに買い物をしていて大丈夫なのだろうか？

この本邸から出たことはないけれど、この領地は私が知らないだけで潤っているのだろうか？……私が気にかけることはないか。どうせ、この家を継ぐのはエリザベスかその夫になるだろうし、もしかしたら義弟が生まれるかもしれないしね。

私はこのまま使用人として一生こき使われるのか、それとも政略結婚の駒にされるのか……父親次第だろう。

でも、成人したらこの家を出て行くつもりだ。それまで生きていられればの話だけど。

「フローラ！ フローラ！ 早く来なさい！」

ふう、帰ってくるなり呼び出すのもいつものことね。あの男の前では本性を隠して猫を被っているからストレスが溜まるらしい。私で発散するのはやめてほしい。

「お呼びで」

「アンタの声は聞きたくないって言ったでしょ！ お前は喋るな！」

バシッ！ ここにも使用人が何人もいるというのに……本当に汚い言葉。

慣れたものでみんな見て見ぬふり。聞こえないふり。そうよね。止めたりしたら次は自分に降りかかるかもしれないものね。別に恨んだりしない。誰だって我が身が可愛いもの。

あくあ、しばらく仰向けで眠っていたのにな、今晚からまたうつせ寝になるのか……気持ちで負けない！ って、ずっと強気で頑張ってきたけれど、もう心が折れそうだ。
誰でもいいから、ここから助け出してくれないかな……



誰も助けてはくれなかったけれど、ここから解放されたのは王都にいる父親から呼び出されたのがきっかけだった。それは誰にも祝われない私の十二歳の誕生日を迎えてからすぐだった。

「この子まで呼び戻すなんて何がありましたの？」

「腹立たしいことに王家から第三王子の婚約者候補にとコイツに打診があった」

王家から？ 一度だけお母様に連れられて王妃様に会ったことがある。もう顔も覚えてないけれどキラキラしていて、とっても綺麗で感動したのを覚えている。

「そんなのおかしい！ わたくしの方が王子様に相応しいわ！ お姫様になるのはわたくしよ！」

エリザベスが不満を露わにして捲り立てている。ですよね。この異母姉が黙っている訳がないものね。

「お父様も可愛いエリザベスこそが相応しいと思っているよ」

「貴方何とかなりませんか？」

義母が父にしなだれかかき懇願している。

「ああ、我が家には娘が二人いると、コイツよりも出来のいいエリザベスがいると推してきた」
「まあ！ それでどうなったの？ お父様！」

「選ぶのは第三王子だが、エリザベスも一緒に呼ばれることになった」
「キヤーお父様素敵！ ありがとう！ 大好き！」
「ふふふつ、エリザベスの引き立て役に丁度いいですわね」

「ああ、エリザベスなら第三王子も気に入るだろう。……エリザベスとコイツに差をつけると印象が悪くなる。コイツもある程度は着飾らせろ」

父親と義母が何か企んでいることは顔を見れば分かる。二年前から私は一枚もドレスを買い与えてもらっていない。どんなドレスを用意するのか分からないけれど……

「それよりもコイツの頬の腫れはどうするつもりなんだ？」

「心配なさらなくても大丈夫ですわ。化粧を濃くすれば上手く誤魔化せますわ」

やっぱりこの人は馬鹿だ。この腫れを隠せるほど子供の私が厚化粧をすればそれを見た相手は違和感を覚えると分からないのだろうか？

「おい！ お前は『はい』と『いいえ』以外口を開くなよ！ 分かったか！」

「はっ」

「お母様！ 明日着ていくドレスを一緒に選んでくださいませ！ とびつきり可愛くしなきゃ！」

「まあ！ 安心しなさい。エリザベスはそのままでも十分可愛いわよ」

「そんなこと分かっているわ！ それでももつと可愛くなりたいの！」

確かにエリザベスは義母に似て人目を引く綺麗な顔立ちをしている。比べて今の私は頬が痩けてガリガリ。目だけが大きくギョロギョロとしている。こんな私なんて誰が見ても不気味だよね。

それに私は王子様になんか興味がない。有り得ないけれど、もし私が選ばれたりしたら今までの比じゃないくらい暴力を振るわれるかもしれない。それこそ命を奪われるほどの……だから王子様に気に入られるよう是非ともエリザベスには頑張ってもらいたい。

「うふふつ。お義姉様つてば、何を着ても地味ね〜」

エリザベスがニヤニヤと笑いながら言う。ホントにね。

第三王子とのお目通りの日がやってきた。まさか、王家の方とお会いするのにこんな格好をさせるなんてね。

エリザベスのお下がりのなのは百歩譲ってありだとして、去年エリザベスが着ていた時はパステルイエローだったと記憶していたけれど、保管方法が悪かったのか薄い茶色に変色していて、所々に元のパステルイエローが見えて斑になっている。

これは使用人のレベルが低い証拠。装飾品も着けていないし、ドレスはぶかぶかだし、私をエリザベスの引き立て役にしたつもりなのでしょね。あの義母は分かっているのかしら？ 王族を馬鹿にしているって響きを買わなければいいけれどね。

それに、如何にも化粧の下を隠しています的な厚化粧。コレで誤魔化せると思っているのなら本当に馬鹿な人。

王妃様が私のことを覚えてくれていたら……なんて考えが甘すぎるわよね。

ピンクのドレスにリボンとフリルで着飾ってご機嫌なエリザベスと、その様子を微笑ましく見つめる父親と義母。

フォネス伯爵家の馬車は広くもないが狭くもない。私は矛先を向けられないように空気になる。でもそれは無駄だった。

「おい、お前は名を呼ばれても視線を合わせるなよ！ ずっと俯いておけ！ 分かったな！」

「……はぐ」

「本当、薄気味悪い瞳ね」

お母様がいつも綺麗だと誉めてくれていた瞳よ。

「言われてみればお義姉様の瞳と同じ色の人を見たことがないわ」

アメジスト色の紫の瞳は珍しいってこと？ 邸から出たことがないから知らない。確かに使用人にも似た瞳の色の人はいなかった。

「……分かったな。気味の悪い目を王族に向けるなよ」

しつこいな。一度言われれば分かるわよ。

「はぐ」

もう話は終わりだと、またエリザベスが中心の話題に変わった。心の中でため息をついて外を眺めることにした。

そのまま馬車に揺られていると幼い頃の記憶が蘇ってきた。

そうだ！ この邸だ！ 門からかなりの距離だけれど奥にお母様と同じ瞳の色の緑色の屋根が見える。

ここがお母様の育った邸だ。ここにお母様の弟が住んでいるのかな？ 私からしたら叔父様になるんだよね？ どんな人なんだろう？ いつか会えるかな？ 久しぶりにワクワクと心が躍った。

でもその邸が見えなくなってしまうばすぐに興味は消えてなくなる。そこからは壁、壁、壁……高い壁で中の様子は窺えなくなった。きつと、これは城壁なのだろう。

そのまま数分。壁が途切れたところにある大きな門を潜ると、どことなく記憶にある巨大な白亜のお城が目の前に迫ってきた。

馬車が止まるとまずは父親が降りた。父親の差し出した手に手を添えて義母、その次にエリザベスが降りた。もちろん私には誰も手を貸してくれない。うん、分かっていた。

通路を歩く間もキョロキョロと見回し、ずっとはしゃいだ声を上げているのはエリザベス。……まあ落ち着きがないのは一目瞭然。そんな娘を注意もしないのが父親と義母。

うーん、二人とも恥だとは思っていないさそうだ。それでも嫌な顔一つ見せず案内をしてくれている王宮侍女はさすがだ。

それにしても広いな。もうすでに十分近くは歩いている。と思う。結局、薔薇に囲まれた庭園に着くまでエリザベスはキヤッキヤと騒ぎ続けていた。

そこには真つ白なテーブルが距離を置いて二つ。そのうちの一つにはすでに美しい女性と、私と

年齢の変わらない男の子が座っていた。王妃様と第三王子だろう。

……ここからは顔を上げないと、『はい』と『いいえ』だけしか言葉を発せない。

ああ、名前を名乗る時は仕方がないよね。

「本日はお招き頂きありがとうございます。私は」

「貴方の挨拶はいいわ。……それよりも今日はよく来てくれたわね。久しぶりねフローラ。……それにエリザベスだったかしら？」

父親の挨拶をどうでもいいかのように王妃様が遮った。王妃様らしくないよね？ ……それに少し不機嫌そう？ 取り敢えず自己紹介はしないと。

「お久しぶりでございます。フローラ・フォネスでございます」

「ええ、元気……そうには見えないわね」

「王妃様！ フ、フローラはびよ、病弱で……」

「そ、そうですね！」

「あなた達には聞いていませんよ」

おおう！ 王妃様、口調は穏やかだけれど確実に父親と義母に怒っているわね。顔を上げられないから想像でしかないけれどね。

「もういいわ。フローラ、招待状を送るから今度ゆっくり二人でお話しましょうね」

「……はい」

「次はエリザベス？ だったわね」

「はあい！ 王妃様あ！ わたくしはエリザベス・フォネスと申しますう。呼んでいただき光栄ですわあ！」

ん〜大丈夫か？

「ロイド、二人をあちらのテーブルに案内してさしあげて……よく見定めなさい」

「はい、母上」

うん、分かっていたわ。第一印象って大事よね。ガリガリ、ポロポロの女の子よりも、綺麗に着飾って元気で可愛い子の方がいいよね。ロイド第三王子様は迷うことなくエリザベスに手を差し出した。

◇ ◇ ◇

「はははっエリザベスは面白いね。僕は君みたいに元気な子は好ましいと思うよ」

「本当ですか〜？ エリザベス嬉しい〜！」

ロイド第三王子とエリザベスは話が弾んでいる。

それよりも！ 目の前にある色とりどりのお菓子から甘い匂いが……つて、食べてもいいのよね？ そうよね？ そのために用意されているのだから。

今食べておかないと次に食べられる機会が何時になるか分からないものね……うん、食べよう。

今ならエリザベスも話に夢中になっている。私のことなんて存在も忘れていよう。



よし！ そくと手を伸ばして手前にあつたクッキーをお皿に一つだけ乗せた。……まだ気付かれていない。今だ！ 食べようとクッキーを掴んだその時。

「まあ！ お義姉様ったら！ ダメですわよ！」
え？

「別にいいじゃないか」

そ、そうですね〜ありがとう！ 顔も知らない王子様！ ではいただきます〜す。

「お義姉様はアレルギーで甘いものは食べてはダメなんです。そうですね？ お義姉様？」
くっ、ここで知らないフリして食べると告げ口されて……その先は想像がつく。

「では仕方がない。君は食べない方がいい」

「……はこ」

「でも、エリザベスの方がお姉さんみたいだね」

「うふふっ。よく言われるんです〜。ロイド様って賢いのですねえ〜」

いや、誰が見てもエリザベスの方が年上に見えるはずよ。毎日栄養のある物を食べているものね！

せめて甘い香りだけでも堪能しよう。それでお腹がいっぱいにならないかな？

……ダメだ。余計にお腹が空いた。朝から……いえ、昨日から何も食べさせてもらっていない。それを訴えるように私のお腹はく〜く〜と小さな悲鳴を上げている。

その間にエリザベスと第三王子の距離はどんどん近づいているのが会話から察せられる。はあ、

もう帰りたい。

それからは空腹に耐え忍び、長く感じたお茶会が終わった。最後に王妃様から声もかけられたが空腹で何も考えられず適当に「はい」と応えて解散になった。

帰りの馬車の中ではご機嫌なエリザベスの声がずっと聞こえていたが、父親からは殺気を向けられていないことに気付いた。

私とエリザベスが第三王子と別のテーブルにいた時間に王妃様との間で何かあったのだろうか？父親の殺気に気づかないフリをして邸に着くまでずっと窓の外を眺めていた。

邸に着くと何か言われる前にと、急いで部屋に戻り使用人の服に着替えた。仕事を始める前に何か一口でもつまめないか調理場に向かう途中で父親の私を呼ぶ怒鳴り声が聞こえた。

クソっ！ ため息を吐くのは許してほしい。

私のこの汚い言葉使いは使用人たちの会話を聞いて覚えた。そう、このレベルの使用人しか今の邸にいないってことだ。

声のする方に向かうと、驚いたことに父親はまだエントランスにいた。鬼のような形相でね。

「お前のせいで!!」

叩かれる！と身構える前に頬に痛みが……十二歳のガリガリの子供が大人の男の力に耐えられるわけもなく勢いよく転がった。

「立て！」

バシッ！

バシッ！

バシッ！

立ち上がる度に手を振り下ろされる。少し立ち上がるのが遅れると今度は蹴られる。

いつまで続くんだ……

もうこのまま殺されるのではないかと死を覚悟した。

バシッ

今日何度目かも分からない痛みを頬を押さえる。

蹴られたお腹も背中も痣だらけだろう。

「この邸から出て行け！」

こうして話は冒頭に戻る。

◇ ◇ ◇

フロアラのいなくなったフォネス伯爵邸では、フォネス伯爵が肩で息をしながらニヤリとほくそ笑んでいた。

やっと、やっと忌々しいあの女の子供を追い出せた。せつかく使用人として使えるところまで置いてやったのに、王家から婚約者候補の打診がアイツに来たせいで予定が狂った。

いつか金持ちのジジイか、我が家の利益になる家に嫁がせようと思っていた。だがどうだろう、今日の王妃は俺と妻を非難と軽蔑の目を向けていたではないか。このままアイツをここには置いておけない。

王妃とアイツに面識があったのは予想外だ。

あの王妃は次はアイツだけを王宮に呼ぶだろう。

ここでの扱いを知られるわけにはいかない。

その前にアイツを始末しないと……

フォネス伯爵はフローラを殴っても蹴っても罪悪感を抱いたことはなかった。だが、自分の手で息の根を止めるのはさすがに躊躇ってしまった。あれだけ痛めつけたら自分がトドメを刺さなくてもどこかで野垂れ死んでくれるだろう、そう思った。

「お父様あゝロイド様の婚約者にわたくしが選ばれるわよね？」

「ああ、お前とロイド殿下は相性が良さそうだったし、きつと選ばれるだろう」

このままエリザベスが王子の婚約者になれば王家とも繋がりが出来る。

我が娘が王子妃か……さすがに第三王子では国王になることはないだろうが我が家は安泰だ。

フォネス伯爵のニヤけ顔が止まらない。

「あなたあゝ王家からいつ婚約の申し込みが来てもいいように新しくドレスを作りましょうよ！」

「それがいいわ！ お父様あゝいいでしょう？」

「はははっ、そうだな。いいぞ〜」

疫病神は追い出した。

エリザベスは我が家の幸運の女神だ。

ついに私にも運がむいてきた！ 最高だ！

フォネス伯爵にとつて、今がまさに絶頂の時であった。



静けさを取り戻した王宮の庭園では、王妃と第三王子ロイドが今日の目通りについて話していた。

「ロイド、今日の素直な感想を聞かせてくれるかしら」

「はい！ 僕はエリザベスと婚約したいです！」

元気に答えるロイドに反して、王妃の表情は暗い。

「……どうして？」

「だってエリザベスはとても可愛かったですし、とても優しい子でしたから」

「どう優しいの？」

「はい！ 異母姉がお菓子を食べようとしていたのをアレルギーだからと止めてあげていました。

まるで異母妹のエリザベスの方が《姉》のようでしたよ」

「……そう。本当にエリザベスでいいのね」

「はい！ 僕の婚約者はエリザベスに決めました」

「わかったわ。下がちなさい」

「はい！」

ふう〜と、王妃は深いため息をついた。

末っ子だからとロイドを甘やかせずぎたのね。見極める力が足りない。今からでも再教育は間に合うかしら？ いえ、王族を名乗るなら今のままではダメね。

ロイドはまだ若い。フローラあの姿を見ても何も分からない。プロフィールは先に教えたはずなのに。

ガリガリに痩せて腫れた頬を隠すための厚化粧。最後まで伏せられた目。フローラより先に生まれたクセに妹のフリをする異母姉のエリザベス。それを否定もしない両親。それらを見れば歴然のことだというのに。

王妃は過ぎ去りし日のことを思い出す。それはまだフローラが無邪気な少女だった頃。ぴよんぴよんとウサギのように駆け回っていた笑顔の可愛い子だったのに……

「ごめんなさい。シルフィーナ」

王妃はフローラの亡き母——シルフィーナに向かって呟いた。こんなになるまで気づかなかったなんて……

「可愛いウサギちゃんだったのに面影もありませんでしたね。ロイドには婚約は早すぎたのではありませんか？」

「キースクリフ、見ていたの？」

第一王子キースクリフが、そしてその後ろから第二王子フェリクスが姿を現した。

「はい、あれは誰が見ても虐げられている子だと気づくと思いますよ」

キースクリフが眉間に皺を寄せながら言う。

「フローラは俺の婚約者にします！」

険しい表情をしたフェリクスが前のめりになって叫んだ。

「フェリクス……分かつているでしょう？ 同じ家から王家には嫁げないと……それに貴方には婚約者がいるでしょう？」

「……俺は、俺の婚約は国の結び付きのため俺の気持ちは……」

フェリクスごめんなさい。王妃は心の中で詫びた。王族の婚姻に個人の気持ちを押し殺さなければならぬこともある。

頭では分かかっていても悔しいわよね。王妃はフェリクスの内心を察した。

「でも！ 俺ならあの子を、フローラを大切にします。もうあの家からフローラを置いてはおけません！ 俺の婚約を解消して下さい！ 一日も早くフローラをあの家から助け出して下さい」

「ダメよ。たとえ王家でも他家の内情に口出しは出来ないわ」

「フェリクス、今は諦めろ」

「クソっ！」

フェリクスは感情を抑えることなく悪態をついた。王妃は分かっている。口は悪くてもフェリクスは穏やかな子だということ。

今はただ、心の中でフェリクスに謝るしかない。王妃は怒りに震えるフェリクスを見守りながらそう思った。

第三章 明かされるフローラの出自

もう何時間歩いているんだろう？ 目的地まで道は真つ直ぐだから間違えてはいないはずだ。もう日は沈んでしまったけれど貴族の邸宅街だからか街灯に照らされて夜道でも明るい。変な人に声をかけられることもなく歩き続けているけれど、もう足が鉛のように重たい。あとどれくらい歩けばいいのだろう。もう無理かもしれない……心が折れそうだ。

このままあの男の言った通り野垂れ死ぬなんて悔しいし嫌だ。まだ歩ける。まだ諦めない。心を強く持て！ 一步一步前に進め！ と自分に言い聞かせる。ガラガラと馬車が近づく音が聞こえる。

……もう前もよく見えない。もう無理……なのかな？ ……意識が……誰か……助けて……意識を失う瞬間、温かい何かに包まれた気がした。もう、目覚めることはないんだろうな。私、頑張ったんだよ。

「お、お母様……」
天国に行ったらお母様に会えるかな……頑張ったねって褒めてくれるかな……



「お帰りなさいませ。旦那様」

「今すぐ！ 今すぐ侍医を呼ぶんだ！」

「そ、そのお方は？」

「いいから早く呼べ！」

「は、はい！」

ローレンス・ステイアート公爵は邸に帰るなり声を荒らげ、侍女たちを急かす。

なんてことだ。この子が姉上の産んだ娘なのか？ こんなに痩せて傷だらけで……

腕に抱いた少女の顔を真剣な眼差しで覗き込む。姉上の子に違いない。確信はある。その髪の色はくすんでいるがステイアート家の色だった。

大切にされて幸せに暮らしていたんじゃないのか？

ローレンスが何度手紙を送っても、姉——シルフィーナからの返事はなかった。姉が亡くなったことも葬式が終わった後に伝えられただけだった。

姉の忘れ形見に会わせてくれと何度も面会を申し込んだ。だが毎回フォネス伯爵は『娘が会いたくないと言っている』『領地に行っている』と言って会わせようとしなかった。

「僕の唯一の姪だというのだ！」

怒りが込み上げてくる。姪の名前と誕生日は貴族名鑑で知った。

「フローラ」

……許さない。絶対に許さない。フォネス伯爵も、嫌がる姉上を無理やり嫁がせた父上も、絶対に許さない。ローレンスは込み上げる怒りを抑えるのに必死であった。

診察の間、ローレンスは部屋から追い出された。

間違いがなければ、フローラは十二歳になったところだ。十二歳とはあんなに軽いものなのか？ いや、そんなはずがない。フローラはガリガリに痩せ細っていた。ロクに食べさせてもらっていなかったのだろうか。貴族の令嬢だというのに使用人の服を着ていた。すべてが有り得なかった。

「どうなんだ？ フローラは大丈夫なのか？」

たまりかねて、フローラを診察中の部屋の中を覗く。ちょうど診察が終わったところだった。

「はい公爵様。過度な疲れと栄養失調ですね。栄養のある物を食べさせてゆっくり休めば大丈夫です。……ただ問題は身体中の痣です。日常的に暴力を受けていたのでしょうか？」

「は？」

こんな小さな身体に日常的に暴力が施されていたという。ローレンスの全身に怒りが込み上げた。「フローラ……もう大丈夫だ。ずっと僕とここで暮らそう？ フローラ……僕が君を守るから。二度と辛い思いはさせないから……本当だよ、だから安心してゆっくりおやすみ」

ローレンスは傷だらけの小さな手を握って誓った。

「う、うくん」

しばらくして、フローラがみじろぎ、薄く目を開いた。

「フローラ！ 気がついたのか？」

「お、かあ……さま？」

「フローラ！」

どうやら寝言を言ったようだった。もしかしたらローレンスを母だと思ったのかもしれない。

安心したのか、うつすらと目を開けたと思ったら微笑んでまた眠ってしまった。

「……可愛いな。血を分けた姪というものは。初めて会ったはずなのに可愛くて愛しさが込み上げてくる」

トントント

ドアをノックする音がし、使用人のマヤが入ってきた。

「旦那様、私が代わりますのでお食事をお取りください」

「いい、今はフローラの側にいたいんだ」

「……シルフィーナ様の小さい頃にそっくりですね」

マヤは部屋に入ってきた時から悲痛な表情をしていた。

「そうか、マヤは姉上の乳母だったね」

「はい。……こんな、こんな……酷い」

ぼろぼろと涙を流すマヤ。ここまでマヤが泣くのはシルフィーナが亡くなったと聞いた時以来で

あった。フローラの状態が目に見えている分、さらに辛いものがあるのかもしれない。

「あの家にフローラは二度と返さない。ずっとここで暮らす。フローラの面倒はマヤが見てくれるだろう？」

「はいっ、はい、ありがとうございます。ありがとうございます。誠心誠意お伝えさせていただきます」

「だからもう泣くな。フローラが起きた時に驚くぞ」

「は、はい！」

「起きるまでは僕が側にいるからマヤには明日から頼むな」

「わかりました。……では失礼します」

ドアが静かに閉じられる。

明日は起きてくれるだろうか？ 起きるよな？

フローラがどんな生活をしてたのか僕に教えてくれ。そして姉上のことも。

◇ ◇ ◇

うん？

温かいしそれに柔らかい？ ここは天国なのかな？ 確認したいけれど、まだこの感覚を感じ

たい。

「フローラ!! 起きたのかい？」

近くで優しい声がある。

「痛むところはないかい？」

「だ、誰？」

見知らぬベッドの横、私の表情を覗き込む男の人がいた。

さらりとした銀髪を綺麗に整え、緑色の目をした男性。すっ、凄くカッコイイ。

「僕はローレンス。フローラの叔父さんだよ」

「お、叔父様？」

この人がお母様の弟で、私の叔父様。……叔父様っていうよりお兄様だよ。

本当にそうなのだろうか？ でもお母様によく似ている。

「そうだよ。昨日、僕が仕事から帰ってきた時に門の前でフローラを見つけたんだ」

そっか。私、ちゃんとここまで来られたんだ。

「あ、ありがとうございます……」

「痛みは？」

「だ、大丈夫。慣れているから……」

そんなつらそうな顔をしないで叔父様。

「フローラ、そんな痛みに慣れてはダメだよ」

「は、はい」

「お腹が空いただろ？　すぐに用意させるね」

「いいの？」

「もちろんだよ。お腹いっぱい食べたらいよいよ」

うぐぐつ、お腹が空いているのに口の中が切れていて痛い。食べづらい。

「ゆっくりお食べ。時間はたっぷりあるからね。痛むのだろう？」

「はい……」

ローレンス叔父様はマヤというお母様の乳母だった人を紹介してくれた。

「フローラ、何があったかは君の状態で大体察しはつく。だからもうあの家には二度と帰らなくていい。だから僕とずっとここで一緒に暮らそう？」

「こ、ここに、居てもいいの？　私、あなたの姪じゃないかもしれないのよ。それでも私を受け入れてくれるの？」

「当たり前じゃないか！　君は姉上にそっくりだ。間違いない。君は姉上の忘れ形見で、僕のため一人の姪なんだよ？」

お母様の実家に辿り着けても、叔父様に受け入れてもらえるかは正直不安だった。もしかしたらフォネス家と同様の扱いを受けるかもしれない。だから凄く、嬉しくて……

「あ、ありがとうございます……ご、ざいます」

「ああ、泣かないでフローラ！」

慌てた叔父様が頭を撫でてくれる。

こんな優しい温もりが久しぶりすぎて嬉しくて涙が止まらない。

泣いちゃってごめんなさい。でも、本当に嬉しいの。

「叔父様、ありがとうございます」

思わず叔父様の胸に飛び込んでしまった！

「か、可愛いすぎるだろ！」

よ、喜んでいるみたいだからいいよね？



「ふふっ、よく眠っていますね」

「ああ、お腹いっぱい食べて、風呂に入ったからな」

フローラが寝入った後、ローレンスとマヤはその寝顔を眺めていた。

「……お坊っちゃま。コレを隠すようにフローラお嬢様の下着のポケットから出てきたのですが」

マヤ……もう僕は成人した大人なだけだな。そう思いながらも、マヤが差し出してきたものが何か、覗き込む。

マヤが見せたものは見覚えのある石のついたネックレスだった。それは姉が大切にしていた、大きなアメジストがついたネックレスだった。見つからないように肌身離さず隠していたのだろう。

フローラが起きたら渡してあげることにした。

ローレンスが懐かしさを覚え、手の中でアメジストを転がしていると、何か仕掛けがあることに気が付いた。石をはめた土台が開くようになっていく。固いが開けられそうだ。

中から出てきた物は小さく折りたたんだ紙だった。フローラに悪いと思いつながらローレンスはそれを読んだ。そこに書かれていたのは、シルフィーナの、決して語られてはいけない「秘密」であった。

「……そうしたことだったのか」

——だから姉上は学園を卒業することなく嫁がされたのか……

ローレンスはおもむろに立ち上がり、

「マヤ、フローラを任せてもいいかな？」

「はい、もちろんです」

「僕は今から少し出てくるよ。フローラが起きたらすぐに帰ってくると伝えてくれ」

「わかりました。行つてらっしゃいませ」

急ぎ邸を後にした。

ローレンスが向かった先は王宮だった。ローレンスは、フローラの瞳を見た時から思っていた。

——僕の知る限りこの国に紫色の瞳はフローラ以外に一人しかない。

優秀なくせに野心もなく無愛想で口数が少なく、何かを諦めたような生氣のない目をしたローレンスの上司・ブラッディ王弟殿下だ。

何があっても、脅してでも、引き摺つてでもフローラのもとに連れて行かねばならない。

「待っていて。フローラ。……君に会わせたい人がいるんだ」

「……コレがシルフィーナの産んだ子なのか？」

フローラを見下ろしているローレンスの上司……ブラッディ王弟殿下の目は、いつも通りの冷めた目だった。

「そうです、閣下」

「……なぜこんなに痩せて傷だらけなんだ？」

「フローラが落ち着いてから聞くつもりですが想像はつきまず」

「……そうだな。……フィーナによく似ている」

やはり気になるのか、ブラッディ王弟殿下はフローラから視線を外さない。

「可愛いでしょう？」

「……なぜ俺をここに呼んだ？」

「フローラが目覚ませば分かりますよ」

驚くか？ 怒るか？ いつも無愛想な彼はどんな反応をするだろうか？ いつも生氣のない目は

どんな色に変わるだろうか？

真実を知った上司の様子を想像するだけで、不謹慎にもワクワクしてしまう自分がいることに、

ローレンスは気付いていた。

ああ、そろそろ起きそうだ。モゾモゾ動き出した。その動きすら可愛いとローレンスと思う。

「起きますよ。覗き込んで下さい」

「……何で俺が」

ブラッディ王弟殿下がローレンスを睨んだ。その顔でどんな人も黙らせてきた。

それでも気になるのかフローラから視線を外さないようだ。

「う、うくん」

「ほら！ よく見ていて下さい」

フローラの瞼が徐々に開かれ、目の前の男と視線が合った。大きな瞳がさらに大きくなった。

「なっ、なんで!!」

ブラッディ王弟殿下が思わず唸る。

「驚きましたか？ 瞳の色が貴方と同じ紫色です。貴方の瞳をフローラが受け継いだのですよ」

「俺の瞳？ 受け継ぐ？」

「そうです。ね！ 可愛いでしょう？ 僕の姪で貴方の娘です」

「お、俺の？ お、俺とシル、フィーナの娘？」

動揺を隠せないブラッディ王弟殿下の目の前に、先ほどのアメジストを差し出す。

「このネックレスに見覚えはありませんか？ 姉上にコレを渡したのは貴方でしょう？」

「あ、ああ」

「裏の仕掛けにコレが」

仕掛けの中の手紙の内容はこうだった。

〜愛するディへ〜

ずっと待っていると約束したのにごめんなさい。

貴方が国を出てすぐにお腹にあなたの子がいることに気付いたの。

私の妊娠を知った父に無理やりフォネス伯爵に嫁がされました。

でも安心して。愛する貴方が帰ってくるまでの契約結婚ですから。指一本触れさせていません。

生まれた子は貴方と同じ瞳の色よ。

フローラは私の宝物なの。

もし、もし私の身に何かがあつて残されたフローラが不幸だったら助けてあげて下さい。

私の最後のお願いです。

会いたいな。最後にひと目でもいいから貴方に会いたい。

もう二度と会えなくても貴方だけを愛しています。

シルフィーナより

「フィーナ……」

「え？」

先ほどの冷めた目から一転し、悲しみの表情を浮かべたブラッディ王弟殿下がフローラを見つめ

る。フローラは何がなんだか分からないといった表情だ。

ローレンスもこの手紙を読むまで、姉が誰の子を妊娠したのかを知らなかった。

しかも、相手が上司のブラッディ王弟殿下だとは……きつとローレンスの父も相手は知らなかったのだろう。知っていたらきつと、ソレを利用していたに違いない。

◇ ◇ ◇

お、驚いた。

お昼寝から目覚めたら目の前に鋭い目つきの知らない男の人が覗き込んでいたから。

叔父様よりも年上なのかな？ 艶やかな黒髪が整えられていて、威厳がある感じ。

でも、私と同じ紫の瞳の色だ。だからなのか親近感が湧いてきた。目が離せない。

知らない男の人も驚いた顔をして固まっている。

そして叔父様が私の持っていたネックレスから紙？ を取り出したことを聞かされた。その内容は想像もつかないものだった。

「え？」

お母様はフォネス伯爵と結婚する前に私を妊娠していて、私の本当の父親が目の前にいるこの人ってこと？ 目の前の人は声も出さずに震えて涙を流していた。そして私だけに聞こえたのは小さな、とても小さな声で……懺悔と愛を囁く言葉だった。

「信じてやれなくてごめん。……俺もフィーナだけを今も愛している」

え？ 本当にこの人が私の？ 喜ぶべき？ うん、娘に野垂れ死ねって言うような男が父親じゃなくてよかったと素直に喜ぶべきだと思うけど……

でも、この人のことは何も知らない。鋭い目の……でもそれはそれで、よく見ると見た目だけなら叔父様レベルでカッコイイと思う。

ただ、この人は突然現れた私を娘だと信じられるのだろうか？

あ！ 信じてもらえなくても私には叔父様がいる！ それに、ずっとここに住んでもいいって言ってくれたから今さら本当の父親が現れたところで変わらないな。

うんうん、こんなに居心地がいいところは手放せない。

「フ、フローラ？ フローラって言うのか？」

「え？ は、はい」

突然抱きしめられたら痛いッ！ 痛い！ 痛い！ でも、泣いているんだよ。それに温かい。お母様が亡くなってから抱きしめられることなんてなかった。

「……俺の、俺の娘なのか？」

「た、たぶん」

「ははっ、ローレンスの言った通りだ。可愛い、存在が愛おしい。で？ その、可愛い俺の娘がなんでこんな姿になっているのか説明しろ！」

こ、怖っ！ いきなり雰囲気が変わったよ。

「それを今から聞きたいと思いますが、フローラ？ 話せるかな？ 体調は大丈夫？」
「はい、大丈夫です」

そこから本当の父親？に抱かれソファに移動した。したのはいい。でもそのまま膝の上なんですけど！ それも後ろから抱きしめられた形で。私は背中に温もりを感じながらこれまでのことを話した。

最初はお母様との十年間。お母様が亡くなるまでは幸せだったこと。その頃によく初恋の人の話を聞かせてくれたこと。その間、お父様？は私の肩に顔を埋めて泣いていた。

あの男——フォネス伯爵はお母様の葬式にも出なかったこと。その二日後には義母と私より早く生まれた異母姉が来たこと。

その日から私の扱いが変わったこと。父親だけではなく義母にまで暴力を受けるようになったこと。ロクに食べさせてもらっていないかったこと。使用人以下の生活だったこと。

王家から私に第三王子の婚約者候補にと打診があったこと。そして、邸から追い出されたこと。もちろん『野垂れ死ね』と言われたこと等、されたことは包み隠さず話した。

「殺す」

話し終えたところで叔父様とお父様？は不穏な言葉を発していた。

「ひ、人殺しはダメですよ！ それで叔父様が罰せられていなくなったら私はどうすればいいの？

……もう一人になるのは嫌なの」

あの人たちには絶対に涙を見せなかつたのに、一度温もりを知ったら失うのが怖くて涙がとめど

なく出てしまった。

「この後は大人の僕たちに任せて、悪いようにはしないよ」

「そうだ。俺の可愛いフローラは何も心配しなくていい」

そんなこんなで長い話は終わったんだけど、お父様？が帰る間に困ったことになった。

私を連れて帰ろうとするお父様？と、渡さないと言い張る叔父様とで、どちらも譲らないから言い争いになったのだ。

「閣下はフローラをどこに連れて帰るつもりですか！」

「王宮だが？」

なぜ王宮が出てくるの？

「ダメですよ！ 王宮ではフローラが心を休めることができないでしょう！」

「……なら、ここに俺も引っ越してくる」

え？ 私のお父様？って結構無茶苦茶な人なの？

「あの一王宮って？」

「ああ、俺は王弟ってやつだからな」

「王弟？ 王弟って？ 国王様の弟の王弟？」

「そうだ、まあ俺は側妃の子だが」

えくく！ 再び驚かされる。叔父様の説得で何とか今日のところはお父様？に帰ってもらうことになったのだけれど、別れ際に「父様」と呼んでほしいと懇願された。

「と、父様？」

呼んでみたらしっくりきた。それに父様の破顔した顔が本当に嬉しそうで、私まで嬉しくなった。父様は明日も必ず会いに来ると言って泣き帰っていった。追い出されたのは昨日のことなのに、目覚めてから数時間の間に地獄から天国に来た感じだ。マヤに温かいお風呂に入れてもらって、ふかふかのベッドに入ってからまだ何か言い忘れていた気が……

あ！ 私、死んでいることになっているかも!!

朝、起きてマヤがワンピースに着替えさせてくれた。少しぶかぶかだけど、新しいお洋服なんて二年ぶりで、生地も柔らかい。まだ全身は痛いけれど歩くことは出来る。それに私は怪我人だけど病人じゃない。この部屋からまだ出たことがないから今から自分の足で歩いて食堂まで行くつもりだったのに！

「と、父様！ 自分で歩けます！ 降ろして下さい」

「ダメだ」

「な、なんで？」

「俺が、俺の娘の可愛いフローラを抱っこしたいからだ」

えゝそんな理由で……でも、優しい手だな。このままずっと甘えなくなる。甘えても、いいんだよね？ ずっと虐げられてきたから、どうしたらいいのかわからない。でも、したいことをしようと思ってる。

「父様ありがとう」とギョツと首に腕を回した。

「!! 俺のフローラが可愛い」

出会ってたった一日で十二歳の娘を可愛いと受け入れてくれたのは、本当にお母様を愛してくれていたからだと思う。よかったね、お母様。でも、早朝から訪問してくるなんて……ねえ？

昨日もだけど、胃に優しい料理を今日もお腹いっぱい食べた。……そのつもりんだけどフォネス伯爵家での食生活環境のせいで小さくなった胃は少しの量を食べただけで満足しちゃう。まだテーブルの上にはたくさんさんの料理が残っているのに……残念。

食後のお茶をしながら、昨日言い忘れていたことを伝えることにした。もちろん、今日も父様の膝の上だ。

「フォネス伯爵から追い出される時に私の死亡届を出すと言われたのですが……私は死んでいることになるのですか？」

「なんだそれは!!」

頭上から父様の大きな声に自然と体がビクリと反応した。

「驚かせてごめんな。フローラに怒った訳じゃないよ」

「ふざけていますね」

叔父様は落ち着いているようだけれど目が怖い。

「まずは確認だ」

それから王妃様私にお茶の招待状を送ると言われたこともついでに伝えた。

「それは無視していいからな」

「そうだよね。死亡届が提出されていたらお誘いも何も意味が無いものね。」

それから父様は、毎日私の死亡届が提出されたか確認していたそうだ。その間、私が何をしていたかと言うと、叔父様の邸で美味しい食事に温かいお風呂、そしてふかふかのベッドでぬくぬくと天国生活を送っていた。

朝起きたらゲッソリ寝れていた顔が丸みを帯び、自分でも血色も良くなっていくのが目に見えて分かるほどだった。

後で聞いたけれどフォネス伯爵が本当に私の死亡届を出したのは、私が追い出されてから一週間後のことだったらしい。その後、父様と叔父様が私のいないところでこんな会話をしていたということ、私は随分と後になってから知ることになるのであった。

◇ ◇ ◇

「やってくれましたね」

「ああ」

蝋燭の光が薄く照らす部屋の中、ブラッディ王弟殿下とローレンス・ステイアート公爵が密談をかわしている。二人とも全く顔が笑っていない。

「まあ、我がステイアート公爵家から姉上とフローラの生活費を毎年渡していましたが、二人のい

ないフォネス伯爵家に渡す必要はなくなりましたね。それもフローラに一切使われていなかったのは歴然ですからね。今年の分は既にフローラの誕生日に渡してしまいましたから、我が家からの振り込みが無くなったことに気付くのは約一年後でしょうけれどね」

「ステイアート公爵家からすれば端金だろ？ その時になって今までのような贅沢な暮らしはフローラが居てこそだったと気付けばいいさ」

「それよりも、死亡届の出たフローラを我が家の養子にと考えているのですが」

話題がフローラの養育の話になる。先ほどの静けさから打って変わり、二人とも身を乗り出した。

「お前は何を言っているんだ？ フローラは俺の娘として俺が引き取るに決まっているだろ？」

「はい？ 住むところはどろするんですか？」

「はっ、そんなものは解決済みだ。あの忌々しい事件で取り潰しになった公爵家の邸を俺が買い取った。既に取り壊しに入っている。半年後には新しい邸が建つ」

「はい？」

ブラッディ王弟殿下の謎の行動力に、ローレンスの口からは思わず疑問形が飛び出す。

「まあ、それまでは今まで通り毎日俺がここに通うことになるが、俺が臣籍降下しランベル公爵を名乗ることも決まった。フローラも俺の決めたルナフローラと名を変える」

「聞いていませんよ！」

「まだ言っていないからな。だが決定事項だ。それにお前もいずれは妻を娶らねばならぬ身だ。フローラのこと俺に任せろ」